

若いこだま

松井英子・作

鈴木琢磨・画



こだま

松井英子・作

鈴木琢磨・画



NDC 913

まつ い えい こ
松 井 英 子

若いこだま

ポプラ社 1974年

308p 21cm (創作ブックス 8)

8093-016008-7764

著者との話し合いにより検印廃止

創作ブックス ⑧

若いこだま

著者 松井英子

印刷 昭和49年2月5日

発行 昭和49年2月20日 ©

発行者 久保田忠夫

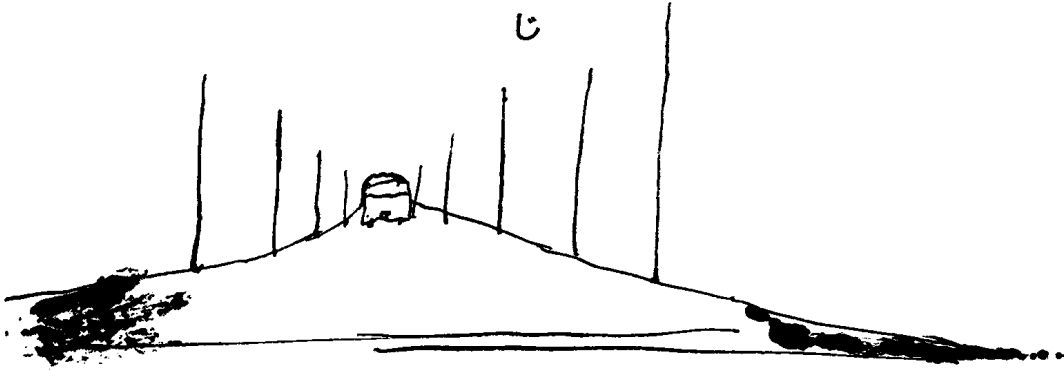
発行所 株式会社ポプラ社

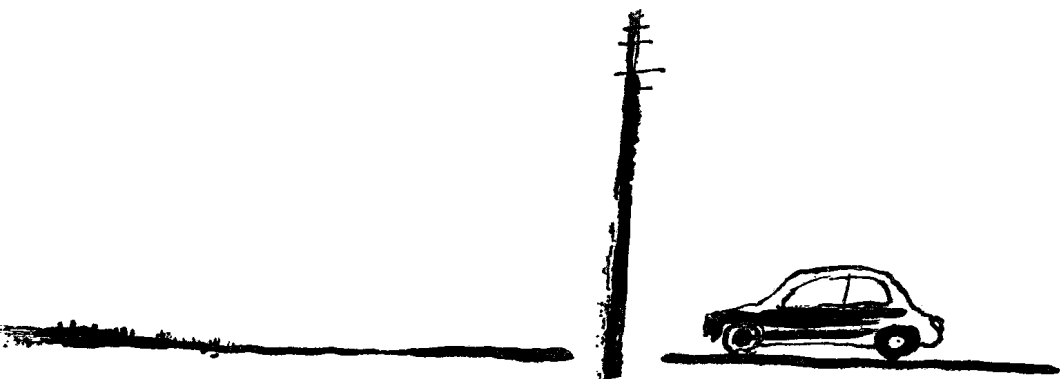
東京都新宿区須賀町5
TEL(357)2211(代)

印刷 新興印刷製本株式会社
製本 富士製本株式会社

落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえます
定価はカバーの裏に表示してあります

も
く
じ





病院の洗面所 せんめんじょ で	6
赤いポロシャツ	16
大東京の夜空のもと	19
国道十七号線	24
力いっぱいの仕事	34
ふるさとのおとなたち	43
怒り いか の煎じ薬 ぐすり	53
あっ、子どもが	62
小さい町工場の片すみで	73
ふたつの世代 せだい	81
一週間ぶりの病院	91
病院とは？	102
おとなにはみえない	106
ロックにのって	117
未成年者 みせいねんしや というな	126
山室製作所 やまむろせいさくじよ	135
胸のなかのミニの娘	145



仕事をすること	155
五階十五号室	164
十七歳の目	169
車いすの患者 かんじや	178
責任とるのはだれ?	187
若いいのち	197
きん子の細いくび	205
私、やめちゃう	215
きつい秋の日	225
ぶっつかりあう音	238
グライNDERのひびき	243
力とバランス	252
赤い色のつよさ	262
昭子の朝	277
とびこえる階段	285
夜をきりさいて	295
あとがき	306

■ 著者紹介 ■

まつ い えい こ
松井 英子

三重県に生まれる。東邦大学薬学部中退。主な著書に「ひとりぼっち」「いちばん美しく」「四つ目のハッピー」などがある。

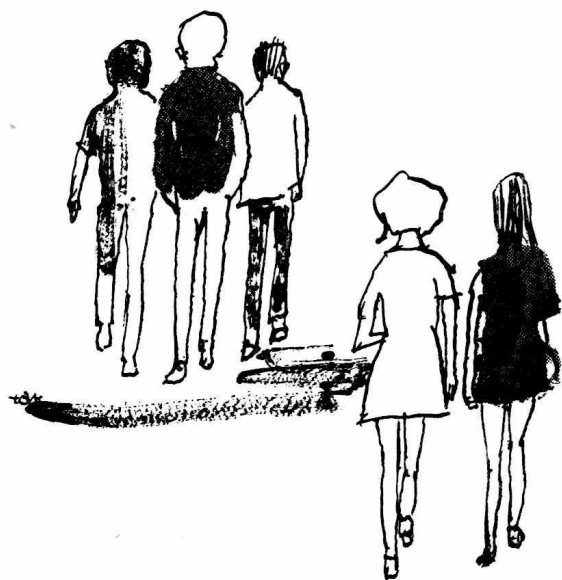
現住所 東京都三鷹市下連雀2-23-4

すず き たく ま
鈴木 琢磨

1918年、横浜に生まれ、東京で育つ。現在、童美連に所属し、広く活躍。主な作品に「口笛のあいつ」「はだかの天使」「おばけ煙突の歌」「少女期」「ふとったきみとやせたぼく」「竜宮へいったトミばあやん」「中学時代」などがある。

若いこだま

松井英子



病院の洗面所で

洗面所のひろい鏡に、昭子の汗ばんだまるっこい顔がうつる。口べにもつけない日やけた顔。プールの作業服、頭にのった白いぼうし。昭子は十七歳。看護助手。そして看護学院の一年生だ。つりぎみな目を力ませ、昭子はぎゅっぎゅっと、山のようなタオルを一枚ずつぬらしては、まいていく。

ここは総合病院、東都病院の七階北病棟である。

昭子のうしろのベランダの向うには、ビルのならんだ東京の空がひろがり、下を通る自動車の音が、わあんとあがってくる。午後五時半。八月はじめの夏の空は、夕焼けにもまだ遠い。

洗面所には、患者の家族がくだものを洗いにくる。魔法びんにお湯をいれにくる。

のろのろとした足どりで、湯のみを片手にやってきた園田のおばあさんは、そのままベランダのいすに、ぐったり腰をおろしてしまう。目から頬にかけての大きなガーゼがいたいたい。ほっと息をつく

と、
「笹野さん、たくさんのタオルを、洗濯ですかいの。御苦労さんですの。」

昭子は、にこっとふりむく。

「ううん、これ、ぬらしてまくだけよ。洗濯は地下の洗濯場でみんなで作ってくれるの。ホットキャビ

ネットへいれて、むしろタオルつくるのよ。」

「あれ、私もそれで、体ふいてもらえませんかいの。汗いっぱいかいてしもうて。」

「あのねえ。」

昭子はこまった顔つきで、

「これ、あしたの用意なのよ。夜は使わないでって、ナースにいわれてんの。ほかのひとにも体をふいてって頼まれたんだけど、ごめんね。あしたナースのひとにふいてもらってね、おばあちゃん。」

「ほうほう、そうですかいの。」

おばあさんは、片目だけの柔和な目でうなずく。はだけたゆかたの衿もとから、肋骨のういた胸がみえる。片目と頬の肉をえぐった手術が、悪性の肉腫であることを、七十歳のおばあさんは知っているだろうか。のろのろとでも、洗面所まであるいてこられるのは、いつまでか。

昭子は、ふいに洗面所から体をのり出すところかを見た。ながいろうかの中央部にナースセンターがある。くびをすくめると、

「いいわ、おばあちゃん、ないしょよ。体ふいたげる。タオル三枚だけ。いいでしょ。あとでベッドへいったげる。」

おばあさんのほうがあわてて手をふる。

「ええの、ええの、笹野さん。あしたふいてもらうから。笹野さんがあんまり元気ようタオルまぎしといなさるので、甘えとうなったの。」

入歯をとったすぼんだ口もとで笑う。

「完全看護なんだものね、ここ。ふいてあげるのがほんとなんだもの。」

「ただ、だ、夜むしタオルをつかってしまえば、洗ってくれるものはない。洗濯場へだせばまる一日かかる。でなければ、その洗濯消毒の仕事が、昭子にかかってくるのだ。」

「やだ、そんなこと。そうでなくても、看護助手、看護助手と、何でも私へ仕事はおぶさってくるんだもん。」

「ええの、ほんとうええのよ。」

「おばあさんは、黙りこんだ昭子が気をわるくしたと思うのか、のぞきこんでにこにこする。」

「お、笹野さんやつてるね。」

「歩行補助機にぐるぐるまきのほうたいの右足をのせた交通事故の飯野、夏休みのあいだに蓄膿症の手術をしておこうという学生の岡。機械にはさまれた腕をつった前田が、やってくる。」

「笹野さんはりきってるよな。すぐ夏休みだもん。」

「どかつといすにかけると、たばこに火をつける。」

「ナースのひとたちも、かわるがわる休みとるんだね。山や海へいく話してるよ。」

「ちきしょ。ことは指くわえて、見てなきやなんないのか。あーあ。」

「どこへいくの？ 笹野さんは。」

「わかんない。」

「わかんないだなんて、それ、ポケットのラブレターが泣くよ。」

「えっ？」



昭子はあわてて胸をおさえた。白い封筒が、いつのまにか胸のポケットからうきあがってきている。

「あはは、ラブレターだつて、うそよう。おふくろさんからだからね。」

「ほんとかな。」

前田がにやにやする。

「おふくろさんの手紙を肌身はなさずもつてるなんて、笹野さんも案外いいところあるんだね。さてはお見合の写真がはいっているのか。」

「ばかね、そんなじゃないよ。」

笑う昭子の胸がはずむ。

「およめさんにはまだ早いよな。」

足をぐるぐるまきにした飯野が、たばこをふきあげる。

「いまのところ笹野さんは、上州うまれ、赤城おろしつてとこだ。」

「何よ、それ。」

手をとめて昭子は口をとがらせる。

「上州名物、かかあ天下と空つかぜ。」

「まっ、あきれた。飯野くん！ 私もうぜつたい、八階の歩行訓練につれてかないからね。」

「まいった。ごめん、ごめん。笹野さんははがらかで働き者だつていうことだよ。怒るほうがおかしいぜ。」

飯野は、頭をかきかき、歩行補助機にすがりついて病室へにげていく。たばこの煙とっしょに笑い

声がわく。

「まったく。がつつんときちやうよ。よくなるとすぐこれだからね。」

昭子は、おとなびたいかたをしながら、まきあげたタオルを手早くキャビネットのなかへつみあげていく。

「若いひとはええこと。病氣しとつても、ほんとにええこと。」

園田のおばあちゃんは、ゆっくり立ちあがる。

昭子は、胸のポケットの手紙を、もう一度おさえた。

ねえちゃん、元気かい。

ぼくも元気です、とかきたいところだが、このところユウウツだよ。とうちゃんとけんかばかりしてるんだ。ぼくが絵をかいてると、文句もんくばかりいうんだ。だからって、ぼくがこんな体で畑へいつて手伝えるかい。それに百姓なんてもうだめさ。にいちちゃんみたいに適当てきとうに見切りつけて、工場へいったほうが利口りこうだよ。どうしてうちのおやじは、がんこに斜陽しゃやうの百姓にしがみついてるんだらうね。おれ、みてるど頭へきちやうよ。じぶんのおやじだもんな。

ねえちゃん夏休みには帰るだろう。まってるよ。そのとき、油絵の道具一式たのんでもいいかい？ 高すぎたら半分でもいい。えへへ。では油絵の具一式のために、がんばってくださいよ。

尊敬する姉貴あねさまどの

最敬礼さいけいれい

和男

昭子は、ふきだしてしまふ。そして涙ぐむ。松葉づえの弟が、油絵の具に最敬礼する気持がわかるのだ。

もう一通は、母からだ。

昭子、毎日あついけど、元気で働いているだろうね。うらのバイパスを、赤城のお山へいく若いひとの自動車、八月にはいつてから、急にふえたよ。昭子は、学校と病院の両方で、きつかりうと、いつも思っているよ。体にはくれぐれも気をつけておくれよ。

うちはいま、夏大根とすいかの出荷でいそがしく、それに今年はメロンにも手を出したもんだから、息をつくひまもねえくらいだ。とうちゃんは今年は夏にまで、座骨神経痛がでちまつてね、昼間はあの気性で消毒薬まきや、集荷に馬力をだしているけれど、夜になると眠れねえらしい。夜中にいらいたばこをのんだりしてるよ。うつかり痛むかいななんていうと、どなりつけるから黙っているけれど、病院にいい薬があったら、もらつてきてもらえねえだろうか。

正広は会社がいそがしく、残業や日曜出勤ばかりで、何ひとつうちの手助けにはならねえし、和男はあんな体だろ。せめておまえがうちにいてくれたらと、かあちゃんは、しょっちゅう思うよ。昭子、夏休みに帰ってきたら、ゆつくり相談したいことがあるんだよ。

では暑さにまけねえようにして、早く帰つてきておくれ。

母より

相談したいこと。それが何だか、昭子にはわかりすぎるくらいわかる。

（ただどかあちゃん、だめだよ。あたいはじぶんであるきだしているんだからね）

去年中学を卒業するとき、昭子はどんなに高校へいきたかつたろう。いや、いけるもんだと思いこんでいた。

「おめえは女だもんな。高校さ、いぐことはねえ。百姓手伝って、ひまひまに、洋裁だの、お花だの、習わせつからよ。嫁にいげばよかんべえ。ええとこさ、いけんぞ。」

「やだよ！ あたいは商業高校へいくんだ。簿記と経理おぼえて、それで女計理士になるんだよ。」

「女計理士って、何する商売だあ？ きいたこともねえ。生意気なことばあ、いってよ。」

父が笑いながらよくいつていたのを、昭子はじょうだんだと思っていた。それが父の本心だとわかったとき、昭子は顔色をかえた。

「あたいはいくよ。とうちゃん、やつとくれよ。にいちゃんだつてやつたでねえか。やだよ！ あたいばかり。」

「ばかやろ。正広はあととりじゃねえか。百姓のあととりが、農業高校ぐらいでねえで、どうすんだ。それにうちには、あとに和男がひかえている。和男みてえな体では、高校ぐらいどうしてもだしてやんねば、どうなる？」

母までが、そばからいった。

「男と女じゃ、同じにはいかねえよ、昭子。中学三年にもなって、もうすこしききわけよくできねえか。がまんしろよ、な。」

「そつたらこといつてるから、かあちゃんは……。」

おなごはそんだと、口ぐせみたいにいってる母が、だからこそ昭子をそんな目にあわせないために、高校へやろうと、なぜしてくれないのか。

うちにいて百姓を手伝えというのをふりきって、昭子はやけくそのように集団就職しゅうだんしゅうくのなかまにはいつて上京じやうきやうをきめた。同じ村のとも子がいつしよだった。

「いいってば、昭ちゃん、高校なんかいがなぐつても、働いてじぶんで金とってみろ。すきなことできんだもの。だれに文句もんぐもいわねえで、何でも買えるよ。みんなじぶんの金だんべ。あたいね、すごいミニの服をつくるんだ。おいしいもんもいっぱいたべてさ。ゴーゴー喫茶きっさもいくよ。昭ちゃん、いっしょにいこうよ、な？」

しゃべっているうちに夢がふくらんで、とも子は目をかがやかせる。きらきら目で、声だけひそめる。

「あたいね、すてきなボーイフレンドもみつけるつもりだよ。」

昭子やとも子がつとめたスーパーマーケットは、チェーン組織で、東京近郊きんきョウにぐいぐいのしている店だった。寮はあったが、バラック建の六畳に三人。朝十時半から夕方六時半まで、立ち通しで追いまわされた。値札ねふだつけ、商品ならべ、勘定台かんどうだいでの商品の袋入れ。夕方になると足がぐくして、ひざがまがらなくなる。足のうらはじんじん痛む。寮へ帰ると口もききたくなかった。そしてスーパーは、たえず売出しをやった。すこしなれてレジを受け持たされると、人ごみにつかれ、レジの勘定あわせに神経をすりへらした。